

しろや！ 広島城



No.69

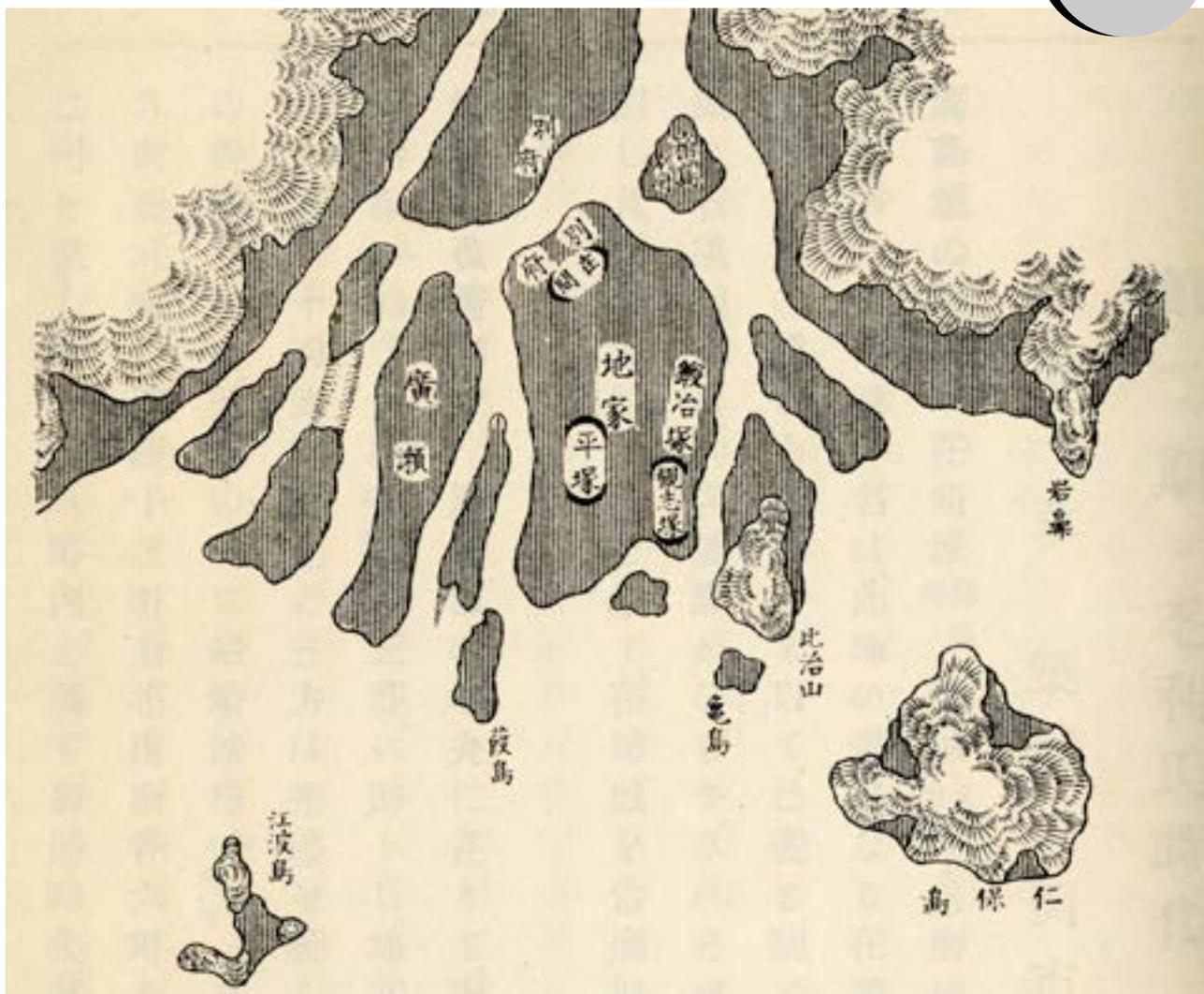


図1 築城前の太田川河口部デルタ(想定) 『広島市史』第一巻(大正11年〔1922〕発行)掲載「五箇庄の図」より

デルタなのに山がある！ 私たち島だったんです

みなさんは広島市の太田川河口部がデルタ(三角州)だということをご存じでしょう。デルタとは河川によって運ばれた土砂が、海などの静水域に堆積してできる地形のことです。太田川は運ぶ土砂の量が多く、広島デルタは教科書等に典型例としてよく紹介されています。

図1は天正17年(1589)の広島城築城以前

の太田川河口部の想定図です。デルタが成長しており、その間には太田川の分流である本川・元安川・京橋川などの原型が形成されています。今と比べると随分土地が狭いですが、この後江戸時代を通して、太田川が運んできて海岸線に堆積した土砂を利用した干拓が続けられ、海に向かって土地が少しずつ拡大しました。こうし

て拓かれた土地は広島城下では新開と呼ばれ、主に耕作地として利用されました。さらに近代に入ってから現在にいたるまで干拓・埋め立てが続けられ、現在の姿になったのです。なお、この土地の伸展にともなって、各川も南に向かって伸びていきました。

ところで、現在この地域にはいくつか山がありますが、よく考えたらデルタに山って変ですよ。そう、これらは元は島で、図1でもそのように描かれており、デルタの成長&土地開発の進展に伴って陸地に取り込まれて山になったものなのです。ここでは、それぞれの「島」がどのように「山」になったのかを見ていきます。

まず、比治山・黄金山周辺についてですが、江戸時代初期の承応2年（1653）に作られた絵図（図2）を見てみると、比治山の北には段原村、東側には比治新開と比治沖新開（のちに合併して比治村）・山崎新開（のちに山崎新開）、西麓には北から竹島新開・岩島新開・亀島新開（のちに3つが合併して亀島新開）が拓かれています。比治山の周辺は土地開発が進んでいることが分かりますが、南側には海が広がっています。この当時、比治山から南側や、その沖にあった



図2 比治山周辺の新開地 「承応二年御城下洪水以後所々堤高下出来絵図」より 広島市立中央図書館蔵

黄金山（当時は仁保島）周辺の干拓は進んでいませんでした。

このあたりの様子が大きく変わるのは、寛文2年（1662）のことで、藩によって比治山と黄金山を結ぶ大堤防が西と東に設けられ、その間に300町歩余（約297ha）の土地が干拓によって

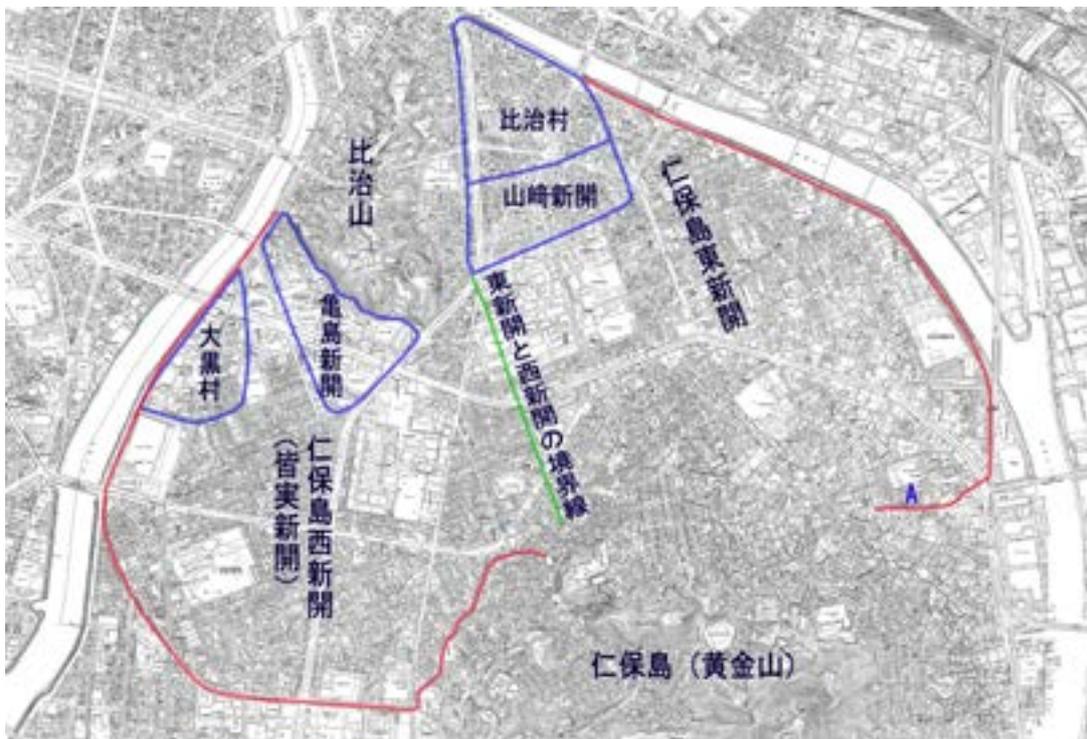


図3 仁保島西・東新開の範囲（推定）

広島市平面図（2500分の1地形図）より作成
ピンクの線が仁保島東・西新開の干拓堤防。

広島市都市整備局都市計画課データ提供

拓されました（図3の範囲）。できた土地の東半分が仁保島東新開、西半分は仁保島西新開と呼ばれ、後者は文政4年（1821）に皆実新開と改称しています。この干拓事業により、比治山も黄金山も島ではなくなりました。

黄金山の南側はその後海に面しており、海岸付近の浅瀬は長く牡蠣や海苔の養殖に使われていました。しかし、昭和33～39年（1958～1964）にかけて埋め立て工事が行われ、仁保新町が設けられています。

江波地区にある江波山・皿山・丸子山は、元は江波島と呼ばれる島でした（図4）。当時、物資を積んだ海船は主に本川（旧太田川）・元安川を遡って城下中心部で荷を下ろしていましたが、遠浅の海だったため、潮の加減によっては船底が深い海船が陸地に近づくことが出来ませんでした。江波島には古くから航路が開かれており、文政年間（1818～1830）ごろには埠頭も築かれ、広島城下の外港としての役割を果たしていました。そこで海船は江波で荷を下ろし、川船に乗せ換えて、城下中心部まで川を遡って運んでいたのです。

その江波島の北でも江戸時代を通じて干拓が進み、土地が拓かれていきます。築城当初の海岸線は老舗料亭羽田別荘（中区舟入町）のやや南あたりと推定されますが、その後舟入新開（開発年代不詳）・舟入沖新開（延宝7年〔1679〕開発。のちに江波新開と改称）が拓かれ、現在の中区舟入南3・4丁目付近にまで土地が広がりました。そして文化8年（1811）に江波島の北岸から北に向かって丸子新開が拓かれました。丸子新開と江波新開との間は水路を残すのみとなり、水路には丸子橋という橋が架けられました。その後水路は明治時代初頭に埋め立てられ、島は完全に陸続きとなったのです。

ところで、この丸子新開が拓かれる直前の文化3年（1806）、とある有名人が江波を訪れています。その名は伊能忠敬^{いのうただたか}。彼は寛政12年（1800）から文化13年（1816）まで、幕命により全国を測量しました。そして、そのデータを基に地図の作成を行いました。完成前に忠



図4 江波島と江戸時代の干拓地（推定）
広島市平面図（2500分の1地形図）より作成
広島市都市整備局都市計画課データ提供

敬は死去。その後文化14年（1817）に弟子らの手によって「大日本沿海輿地全図（通称、伊能図）」が完成しています。

さて、忠敬が江波を訪れた時にはまだ丸子新開は拓かれておらず、島の状態で測量したのですが、その後丸子新開が拓かれました

忠敬は文化10年（1813）にも広島城下を訪れています。しかし、この時は江波には立ち寄りませんでしたので、島がほぼ地続きになったとは知らず、その結果、伊能図には以前のまま島として描写されてしまったのでした。

なお、島の南側は江戸時代には干拓が行われず、昭和初期まで黄金山と同様に浅瀬を利用した海苔養殖が盛んにおこなわれていました。漫画『この世界の片隅に』の主人公すずの実家が江波にあって海苔養殖を営んでいましたが、彼らの養殖場も島の南側付近だったのではないかと思います。また、子どものすずさんが、潮が引いたあとに現れる浅瀬を渡り草津に向かうというシーンがあるのですが、大量の土砂が堆積していたことがうかがえる表現です。実際この浅瀬は昭和8年（1933）に発行された地図（図5）にも描写されています。

浅瀬は明治に入ってから段階的に開発が進み

ました。特に昭和15年(1940)から始まった広島工業港の建設に伴って大きく埋め立てられ、現在の中区江波西・江波南・江波沖町ができました。すずさんの父親もこれに伴って海苔養殖業を廃業したことが作中で語られています。こうして島は周辺を陸地化され海から離れてし

まったのでした。

このように、山になった島のストーリーは広島市沿岸部の土地の成り立ちを雄弁に語ってくれます。ほかにも土地開発の痕跡はあちらこちらに残っていますので、皆さんも是非探してみてください。(本田美和子)



図5 昭和初期の太田川河口部の様子 「5万分の1地形図広島10号 参謀本部陸地測量部 昭和8年」より
スタンフォード大学蔵

庚午・観音・江波・吉島の地先に砂州が形成されている(点線で囲まれている部分)。後にこれらの浅瀬を利用して広島工業港建設のための埋め立て工事が行われることになる。

連載

コラム—これからの広島城—

広島市では、広島城の歴史・文化の発信拠点及び観光拠点として魅力の向上を図るため、様々な取組を行っています。再建から60年以上が経過し老朽化が進む天守閣を歴史に忠実に復元するための調査検討や、中央公園の他エリアと連動したにぎわいの創出を図るため、令和6年度以降の供用開始を目指し、広島城三の丸に飲食・物販施設や多目的広場、展示収蔵施設の整備を進めるなど、これから広島城一帯が大きく変化します。

今後このコラムでは、広島城の魅力向上に向けた取組をご紹介します。

(広島市市民局文化スポーツ部文化振興課)

しろうや
!
広島城

編集・発行
公益財団法人広島市文化財団
広島城
〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519
令和3年10月22日発行

広島城利用案内
開館時間：9：00～18：00
(12月～2月は9：00～17：00)
入館の受付は閉館の30分前まで
入館料：大人370円(280円) 中学生以下無料
高校生相当・シニア(65歳以上)180円(100円)
()内は30名以上の団体料金
休館日：12月29日～12月31日(臨時休館あり)
ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>